



# 羅針盤

清島 真理子  
Mariko Seishima

岐阜大学医学部皮膚科 教授, Visual Dermatology 編集協力者



## まるわかり生体検査！ 頼れる診断ツールを完全マスター

皮膚科診療では問診、視診、触診が基本であるが、診断を確定し治療を開始する過程では生体検査が必要となる。医療の高度化に伴い、生体検査はなくてはならない存在になってきた。

検査には大きく分けて生体検査と検体検査の2種類がある。生体検査は体の機能を直接調べ、一方の検体検査は生体から採取した血液、尿、組織などからデータを得る。本書では皮膚疾患の診断を主体に考え、生体検査のなかでも心電図や内視鏡検査など、皮膚疾患診断に必要な度の低い検査は除いた。それに対し検体検査については、生検(病理検査)や遺伝子検査、皮膚感染症検査(病原体検査)は診断に重要と考え、含めることとした。

皮膚所見と検査データから診断そして治療へと進むスムーズな流れの場合はよいが、実際には診断に難渋し、検査を多用することも少なくない。そのような症例でも安易な網羅的検査、ルーチン化した検査は行うべきではなく、明確に目的を絞って検査をすべきである。必要な検査をベストのタイミングで効率よく行い、正しく評価して、的確な診断と治療に結びつけるために本書を役立てていただきたい。

これら検査の習熟度は各施設、各医師により異なる。稀にしか行わない、あるいは初めて行う検査については基本的な方法を学ぶために、そして日常的に行われる検査については、他施設での方法を参考にしてさらに工夫を加えるために活用していただきたい。

本書の特徴は各項目でまず検査の概略を示し、臨床医として重要なポイント(その検査で何がわかるのか、長所、短所、保険点数、操作の難易度等)を簡潔に記した。さらに、どのような症例で有用かを実際の症例で提示した。生体検査の多くは侵襲が少ないものの、CTやX線検査のように

被曝したり、アレルギー負荷試験のように生命のリスクを伴うこともある。また、生検では侵襲を伴う。そこで患者さんへの説明と同意の手順を示し、一部では実際に使用している説明・同意書を参考に載せた。検査に必要な機材、試薬、機器については実例をあげて特徴を示し、さらに検査手順、評価手順も詳細に記載した。

本書は大きく3つのPartに分かれる。第1のPartは皮膚疾患の形態の検査で、まずは日常診療でマスターすることが必須であるダーモスコピーと表在エコー(皮膚エコー)を取り上げた。肉眼あるいは触診のみより何倍もの情報を侵襲なく得ることができる。

第2のPartではアレルギー検査、遺伝子検査などを取り上げた。これらは問診や臨床所見から目的を絞って検査する必要があり、いずれも診断確定や原因の特定に役立つ。とくに腫瘍の遺伝子検査は治療に直結する。

第3のPartは皮膚感染症や節足動物による皮膚疾患の検査である。「鱗屑をみたら KOH 鏡検、滲出液あるいは膿があったら必ず細菌培養を行う」のが皮膚感染症診断の基本である。以前から行われてきた塗抹検査、KOH 鏡検のほかに最近では簡易迅速キット、PCR 検査が加わり迅速な診断が可能となった。これらの方法を紹介する。

また、病原体の同定には質量分析法(MALDI-TOF MS: マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析法)が主流であり、短時間に正確な同定が可能となっている。最後にこの検査法をコラムで紹介した。

検査法は日々進歩する。したがって常に最新の情報を得ておくことが大切である。また、検査の有用性と限界を知ることが重要である。本書がデスクの片隅に置かれて皮膚科診療に役立つ一冊となることを願っている。